

第三章 悪の問題

悪は何故に存在してゐるかと言ふ問題は、
 何故に不完全が存在してゐるか、
 亦ち換言す
 此の何故に苟くも創造が
 あるかと言ふこと、
 即ち創造は不完全でな
 ければならぬと云ふこと、
 且
 漸進的になければならぬ
 と云ふこと、
 即ち創造は不完全でな
 ければならぬと云ふこと、
 は眞実と
 題を尋ねるは無益なりと云ふ
 ことは眞実と
 定せぬゆゑなりといふ。
 然し、我々が尋ねるべき眞
 の問題は、この
 不完全は究極の眞理なるか、
 悪は絶対的で、
 究極的のものに
 なるかと言ふことである。
 河
 は河の限界、
 即ち河岸を
 持つ河全体が岸に
 あるか。換言すれば、
 岸は河に内する究極
 の事であるか。岸と云ふ
 此等の障碍は環
 一、河の水に前進運動を
 与へないのか。曳
 綱は船を束縛する。然し、
 束縛が曳綱の趣意

であるの如く。寒網は同時に船王前に進めまい
 の如く。世界の流氷は其の限界を持つ。さうでなけ
 れば、世界の流氷は存在し得ない。然し、世
 界の流氷の目的は、其れを抑止する限界の裡
 に示されるが如くして、完全に向つてこの運動の裡に
 示される。不思議なことは、この世に障りや
 苦みがあることではない。法と秩序、美と歡
 楽、善と悪があるが如く、か不思議なものを。人言
 々の本質に神王宿してあるとの考へを捨て、こ
 とは、尚更ら不思議である。人言は不完全と
 見ゆるものには完全なるもの、示現である。心
 の奥底から感じてある。丁か、音楽王聞合け
 る能力有る者か、實際は唯調子の連続に耳を
 傾けておるに過ぎぬものに、その歌の完全を了
 解するが如くである。人言は一大矛盾事を其見
 出し、左にその制限されるもの、その限界内
 に幽閉されるが如く、常に動はつゝあり、かく
 し、毎瞬時にその有限性から輝脱しつゝある
 と云ふことである。

實際、不定全と云ふことは定全の不在は
 なく、有限は無限と矛盾するものではない。
 互小らば部令の中に現はす小左定全であり、
 限界内に現はす小左無限である。人間の有限
 性によ來する感じである苦痛は人生の固定物
 ではない。苦痛は歡茂か左と互小の目的
 ではない。苦痛は創造の眞の永續性
 に与らさいことかわかる。苦痛の此世にある
 は、誤謬の知的生活に於る如くものである。

科学の癸辰史を述ることは、科学が色の時
 代に流布せしめ左誤謬の迷路を述り行くこと
 である。然し、科学は誤謬を普及せしむる唯
 一の完全な方法であるとは誰しも事實信しな
 い。眞理の漸進的発見は科学史に於て記録す
 るべき重要事であり、科学の無数の誤謬は記
 録すべき重要事ではない。誤謬は互の性質上
 停止し、互の間に互は不能である。眞理は其
 に停止し、互の間に互は不能である。旅行者
 の如く、互の勘定が扱ひ得ぬや否や、宿を互

去らぬ心ならずい。知的誤謬に於る如く、
 の指に何事か他の形の。悲に於ては、悲の本質
 は永続性である。それはいふ、悲は全作と一致し得ぬ
 からである。毎瞬時、物事の全作性によつて
 悲は矯正すべし。あり、その局面を悲じつゝ
 ある。我々には悲を停止せざるべし。悲は測り知れぬ
 とに於て、悲の重要さを誇張するべし。死と腐
 此の地上に、毎瞬時、生起しつゝある。死と腐
 敗との莫大な統計。統計を悲め得るならぬ、
 それはいふ、我々には愕然とせしむるべし。然し
 、悲は常に動する。ある、悲は測り知れぬ。莫
 大に於ては、拘らぬ。生命の流るるに、充分には喜ぶ
 得ずい。それ、我々には大地、水、空気が生け
 る存在に於て、心地好く、清い、まごめるの
 まを見る。かゝる統計のすべしは、勤い、まごめる
 の。正靜的に現はす。とす。企て、かゝる一
 の。致に實際には持つてゐる。意味を持つや
 にならぬ。この理由から、職業上、人生の何
 等か特別の方面に關係してゐる人は、その大

計の如く見ゆるであらう。然し、生の世界に
 於ては、死の思想は我々の致さずしも左右し
 得ぬことと知る。それは死が久しも眼に見え
 ぬからでなく、生の消極的方面であるからで
 ある。我々は、毎瞬時、眼瞼を閉ぢる事実が
 あるに拘らず、重要なものは眼を用いて知るこ
 とであるのと同様なことである。生は全作と
 し、死は死を真面目にとつておさむ。生は死の
 面前で、笑ひ、踊り、戯れ、建設し、蕃殖し
 去る。我々は死がその一部分である生の全作
 たる見失子。顕微鏡を通じ、一片の布を見る
 如く山のてある。それは網の存に見えぬ。
 我々は大きな光を眺め、想像に描いて衰へる
 。然し、死は荒極の存在でなく、いふのが真
 理である。空が青く見ゆる如く、死は黒く見
 中る。然し、空がそのしみに鳥の翼に残さぬ
 如く死は存在を黒くし去る。
 我々如くかんと試みたり子を見守る時、我

々は其の教知小ぬ失敗を見る。その成功は多
 くない。もし、我々が己心の觀察を狭い時
 に限らねばならぬ。其の度量は
 残敵を扱つたら。然し、その反復せる失敗
 に拘らば子供には、その一見不可能なる
 力を得る歡喜の衝動がある。これを知らず。我
 々は、子供はよし一刻に違ふやと、倒れる
 ことより、事率う平均を保つ力を考へるもの
 と云ふ子を知る。

の如く、我々は毎日の生活に於て、
 若しみにあふ。その若しや我が知識や使
 用し得る力や意思を實際に適用すること
 不完全に表はす。ある。然し、若し此
 等の二つが我々の弱点を示すのみならず、我
 々の全く意氣銷沈して死んで終つてあらう。
 我々が自命の活動の狭い範囲を觀察のため
 選ぶ時、我々の個性の失敗や不幸は、我々の
 頭の中を大きくぼけつと浮ぶ出て見ゆる。然
 し、我々の生活は我々をして本能的に広い觀察

正 向 け て 居 り、 正 小 に 向 っ て 運 動 し て 居 る 如
 ら び 有 る。 我 々 の 生 命 の 權 限 は、 正 小 故 に 正
 の 成 功 より 無 限 に 大 び 有 る。 正 し じ 生 命 が 進
 む に 一 歩 一 歩、 如 何 なる 眞 理 の 実 現 出 づ の 生 命
 を 洗 局 と 云 々 不 毛 の 眼 野 に 勤 力 なる 儘 に
 は し じ 置 かせ び、 彼 方 の 領域 へ と 運 入 び 行
 く の 正 生 命 は 見 出 ず の び 有 る。 悪 は 一 つ 途 也
 人 生 の 歩 進 を 大 道 び 抑 止 し、 人 生 の 新 有 物 を
 強 奪 する 正 じ ば 去 来 する べ 何 故 かな 小 故、 悪
 は 進 ぶ べ び 行 け ぬ 所 なる 如、 善 以 かな 如 何
 なる 如、 立 ち 停 っ て 道 を 塞 ぶ、 全 作 を 攻 撃 する
 正 じ ば 出 来 ぬ べ び 有 る。 (72) 若 し 最 小 の 悪 び
 正 何 處 かに 漢 然 じ 止 ち 停 っ て 進 ぶ べ び 如 何、
 正 小 は 存 在 の 根 に 食 び 込 ん び、 切 り 込 ん び 正
 び 有 る。 所 以 実 は 人 なる 正、 眞 に 悪 を 後 じ ち
 へ。 丁 女、 正 子 有 る の 結 ば 不 調 和 を 調 子 の
 非常 なる 苦 痛 を 作 る ため には 如 何 じ 造 ら 小 左 じ 後
 じ 得 ぬ じ 同 じ び 有 る。 尤 也、 統 計 の 力 を 藉 じ
 正 不 調 和 の 蓋 越 率 は 調 和 の 正 小 より 遠 かに 大
 なる 正 じ、 正 子 有 る 正 奏 し 得 る 一 人 に 対 し

妻し得ぬ人は数学と有る。之を数学的に証明
 明し得る。現実の矛盾より完全なる可能性
 の方が優つておるのである。疑ひもなく、存
 在は絶対的である。生長した人々はあつた。然
 し、人々はその人々を真面目にとり得ぬ。そ
 の人々の悲観論は知的乃至感情的な、学を
 る見せ掛けに過ぎぬ。然し生命そのものは、
 楽観的のものである。生命は前進を要求する
 。悲観論は一種の精神的飲酒狂である。それ
 は健康にたいし、營養物を⁽⁹³⁾蔑視し、其在非難する
 強烈な飲物に耽る。そして一層強烈な一飲み
 王湯を求め、人為的な意気阻喪に陥つておる。
 若し存在が裏びあつたらば、その証明に哲
 学者を待つ要はなからう。それは丁度、その
 百中肉を着て前に立つておるの如く、お前は自
 殺したと判決する按字の如くである。存在自身
 は数に於て裏びあり得ぬと云ふことは証明す
 るべきである。
 全然不完全と云ふことは、理起し
 完全を待つ不完全は、絶えざる完全の可能

て善くは何ぞあるかを示した人々に最善の教
 意を表明して来たものがある。
 質問が癸せられる。即ち「善くは
 何か。」と。我々の道徳的性質は何れを急
 味するか。と。私の答へは次の通りである。
 「人よか自己の真我にいつて掘けられぬ
 姿を止し始めるとき、人よか自己は現在見ゆる姿
 より更に一段偉大である。了解する時、自己
 の道徳的性質を急識し始める。その時に、
 人よか自己が未だ成つておらずのものを知り、
 になり、未だ経験して居る状態が刻下の経
 験の下にある状態より本意のものとなる。正
 しく、これを知らずにはなる。仲然的に、其の人
 々の人生の見透しが変つて来、意思が物慾に
 取つて代る。である。こゝ小意思は一層広げ生
 活を得んとする。最善の心致であるから。その
 一層広げ生活とは、大部分は我々の現在の到
 達範囲外に在り、その目的物は大部分我々の
 見えない所に在り、そのまのまのである。その時に
 我々の小我と大我との平均、我々の物慾と

意思との争ひ、我々の官能を左右する事物と
 我々の心の裡にある目的との争ひが起る。そ
 の時に我々は自己が即刻に望むものと善なる
 ものとを区別し始めらる。こゝに、善は我々の大
 我にとり望まざらざらぬ。かくの
 如く善の觀念は我々の生活に於いて一層眞
 なる觀察から出て来るものがある。この觀察
 は人生の領域の全作性についてこの圓環ある觀
 察であり、我々の前に現存せるもののみならず
 亦、現存しないものをも考慮に入ら。且つ人
 々の見地からすれば、恐らく決してあり得な
 い様子のものも考慮に入らる。生見
 の明ある人は、未知現存しておかない自己の
 人生に於いて敏感である。現に言人における生
 活に於いてより、その方に対しては、たゞ
 く敏感である。その故に、彼は未知現の未來
 の爲に自己の現在の嗜好を去りて犠牲にする
 。この犠牲に於いて、その人は眞理を實現す
 ることとなるから偉大となる。有効に利己的
 であらねばならぬ。人はこの眞理を認めぬ

必要ならぬ。むしろ自今の刻下の衝動を抑制
 せねばならぬ。換言すれば、道德的に存ら
 ぬ必要ならぬ。此れ我々の道德的能力は、人
 生は行為の目的もなく、相連続せざる断片か
 ら成るものには非ざるを知らざる能力であるから
 ぬ。この人々の道德觀念は自我は時々のに建
 続しておるに云ふことを知る力を人々に与へ
 るのみでなく、人々が自我に閉込められぬの
 ためにおる時分をさしと云ふことを知るため
 得るの必要あり。人々は事實に即して知る時よ
 り、真理の中に在る時の方が偉いのである。
 人々自身の内性の中に含まれぬ居た、又人
 々が知りさしにせぬ個人に人々は属してお
 るのである。人々は現在の意識の外に在る未
 来の自我に敏感である。自己の内性の限
 界外に在る一層大なる自我に対し、これ敏感で
 ある。この敏感を或る程を保持せぬ人、誰か他
 人のために自今の利己的欲望を犠牲にせぬ人
 、何事かの損失、或は難儀を蒙らぬか誰か他
 人に悦ばしむるがため却つて悦ぶを感ぜぬか
 人

右人は一人も加へない。人は孤立せる存在に
 非ずない。人は百人共通の面を持つてゐると
 云ふことは無理である。人は加ふことと
 解する時偉大となる。最も悪性の利己主義と
 雖も、悪王が力を求めるとき、このことを
 認識する。この無理を無視して、しかも強
 を得た故である。この無理の助けを求め
 る爲には、利己主義は或る程は利己的に存
 らねばならぬ。泥棒の一隊は、一隊として強
 合するに非ぬ。は道德的に行ければならぬ。
 泥棒は全世界を盗み得やうか、お互に盗玉
 のけにはゆかぬ。不道德な意思を成功せず左
 めには、その武器の若干は道德的に与らねば
 ならぬ。實際、悪王が爲し、我々の自身の利益の
 ために彼の個人を利用し、他の子民から必
 ず権利を奪ふ力を最も有効に我々に与へる。
 は、我々の道德的力をもつてあることか
 屢びある。動物の生活は眼先の現在のみに
 知つてゐるわけ故、非道德的である。人は
 生活は不道德的であり得る。然し、このこと

は、三小が道徳的基礎を持たねばならぬと云ふことと正指してあるに違ふがぬ。不道徳的をもつたは、不道徳性から道徳的である。丁か、誤謬を及ぼしは、真理であり、或は誤りである。得ぬのと同じである。見之ぬと云ふことは、目であること如か、誤り見ると云ふことは、不道徳性から見ると云ふことである。人々の利己主義は人生に於ける例の關係、例の目的を知らざるである。それとして利己主義の命に従つて行動することとは自己抑制と行爲の調節とを要する。利己的人では自己のためには甚人び難儀をなめる。不平も云はすに難儀辛苦に堪へる。こゝに單に苦痛であり、難儀である。は短時間の見地からすれば、一つは大きな見透しの中に見られ小石時の云々である。云々理由からに違ふがぬ。かくして小我にたり損失があるものは大我にたり利得であり、且つその逆も各異である。或る主義のためには生ずる、王家のためには人歎のためには生ずる人にとつては、人生は

広々意味を指す、苦痛はその程かけ重要で
 なくある。善の生活を送ることは全作の生活
 を送ることにあつた。快樂は己一個の自我のた
 めのものではないが、善は全人類の幸福と永久
 の幸福とに關係してある。善の見地からすれば
 快、快樂は要する意味のものを見中する。そ
 れは、要する意味に見中するから、人生により
 高い価値を与ふるものとして快樂は避けられ
 るから知れぬし、苦痛はその代りに求められ
 るから知れぬし、我々の山々も歓迎されるから
 知れぬし。人間の生活の此等高い見地からす
 ると、快樂はその絶対的価値を失ふ。狗教者は
 こゝから史に於て証明し、我々はその日と我々の
 生活に於て、小は、狗教で証明し、あつた。我
 々が海から水差しに一杯の水を汲む時、その水
 は重みを持つてあつた。然し我々が海自作の中
 に漬かると時に、数々杯の水差しに水は我々の
 の致上に漂ふてあつた。我々は其の重みを感
 じない。我々は自我と云ふ水差しを自力で運
 ぶのは容易からない。その故に利己と云ふ面では、

快者は十分を意味を持つて居るが、道德面に
 於ては、快者は大變輕くなるので、
 虚し左人は押潰す指を試鍊下の忍耐、悪意を
 する迫善王物とせしむる忍耐の点で我々に殆ん
 ど超人的に見えらるるのである。
 完全な善の状態で生きた行くことは、無限
 なるものの中に浸つて自己の靈的生命の可能
 性を実現するに在り得るのである。こゝは、生命の全
 作性によつてこの道德的目境と云ふ我々の固有
 の力により爲し得る最も広げ生命の觀察であ
 る。それとして、
 佛陀の教へは、この道德的力を最
 高に養成し、我々の活動の範囲は我々の狭
 い自我の面に束縛せしむることを王知らすので
 ある。こゝは、即ちキリストの天子の目境に
 ある。我々が道德的生活なる普遍的生活を達
 する時、我々は快善の束縛から釈放せしむる。自
 我が去つて空虚になりし場所は無限の意から
 発する之も云へぬ歡喜に満ちられる。この状
 態では靈の活動力は却つて昂められる。靈の
 活動の原動力は欲望から来るのでなく、靈

の活動自身の花に在る。こゝ即ちギータ
 の羯磨瑜伽(28)、即ち無私無慾の善の活動力の使
 用によつて無限者の活動と一に在る道である

○
 佛陀(29)

かちと冥契した時、次の眞理に到達した。即ち
 、人々の全作の存かに個体を改却すること
 よつて最高の目的を達する時、苦痛の奴隷た
 ることから脱かると。この点を更に十分に
 考へることにしよう。

余の教へ子が、嘗て、私に嵐の中での冒
 険を話し、啣つて云ふに、自然界の此の大
 騷擾は、彼は字に一攫みの塵び、あるかの
 如くに彼に対し振舞つてゐると感じて其の中
 懐子で小を。他人を要する意思を持つ特殊
 の人格者か云ふに、嵐の狂暴に此の暴
 響も子へをかつてある。
 私は「若し我々の個性に対する自然の側で
 の考慮が自然をその道から曲がらせることか
 ぶ来たるならば、最も苦しむ者は個人ならうし

と答へた。

然し、教へ字は「無視」することの出来ぬ

事実——余は存在了と云ふ感情がありおすし

と云つてその疑問を固執した。我々のうち

在る「自我」はその自我に個的である關係を

求めるに云ふのである。私は答へた。「自我

」の關係は「非我」である何物かである。

「小」は我々は兩者に共通な媒介物を持つた物ば

かりぬ。そして我々は共通なものには「自我」

に對して、全く「非我」に對するとは同じであ

る。と確信しておきければさぬのであると。

このことは交互に繰返して云ふ必要のあるこ

とである。我々は自己の個性は、その性質上

、普遍的なものである。と云ふことと、余儀なくせ

るのなと云ふこととを記憶せねばならぬ。我

々の肉作はるは自身物質を食はると試みる

ならは、左に死ぬばかりである。眼が眼自身

しか視ることが出来ぬなら、眼の本分の意義

を失ふ。

想像力が強く、小は存る程、小は却つて

架空的でなく、却つて真理と調和する
 ことと自我とは見出す如く、その中に我々此
 自己の個性が力強い程、自己の個性
 は普遍的なものである。この個性の偉大は其れ自作に
 在るのどはなく、普遍的なものである。中味に在る
 からのどある。丁か、湖の深さは湖の窩みの大
 さによつて測らるるのど同じである。
 さに、人の本性の撞は真実に対してい
 あり、人の個性は自ら作つた奇怪な宇宙で
 満足去来ぬと、いふことか真実ならぬ、人の
 意思は事物を唯その法に従つて處置し得るの
 みであり、個性の欲するものに事物を扱は得
 ると云ふ方が個性に限り明かに最善のこととて
 ある。この真実の頑強なる確実さは、我々の
 意思に時々逆らひ、屢々我々を災害に導く
 である。丁か、あるく、積古にして倒れし子
 常は土の堅固さが傷けるか如くである。然し
 子の歩行も可能ならしむるその同じ土の堅固

下かろの子王傷けるのである。嘗つて橋の下
 まよふル時、余の船お橋か橋桁の一本に掛
 まつた。若し一瞬時でも、橋が一才か二才曲
 るか、橋が長くびをしておろる猫の背にその背
 をあやるか、河が凹むたなら、余にヒリ牙
 事好都合であつたらう。然し、それらは余
 の詮方をさぐに頓着しなかつた。二ル余が河を
 利用し、橋の助けを藉りて溯り得た理由であ
 り、且つ河の流氷が都合悪しき時に橋に頼り
 得し理由である。事物はそれルが儘のも
 のである。我々は事物を處理せんとして欲するな
 らば、事物を知らぬ事なからん。事物を知る
 ことには我々の欲望は事物の法則でないたる可
 能である。この物を知らんと云ふことは我々に
 ヒリ歡喜である。二ル我々の外なる物と我々
 との關係の媒介物の一なる故である。即ちそ
 小は我々の外なる物を我々自身のものとする
 ことである。かくして自我の限界を拓けるこ
 とである。

我々は一歩毎に、自今自身以外のものを考

慮に入らぬやうな心。これ死に於て始めて
 我々の孤独となるが故である。詩人は、自己
 の個人的觀念を凡この人々に愉快ならしむる
 ことと出来たる時に眞の詩人存のである。若し
 詩人凡この讀者に共通な媒介物を持たずか
 たらざらば、彼は万人を花にむすことば出
 来ないであらう。この共通の玉は、それ自
 身の原則を有し、詩人はそれを見出し、それ
 に従はねばならぬ。それによつて
 詩人は眞の詩人となり、詩的不滅を達する。

して見れば、人言の個性は人言の最高の眞
 理である。これと我々は知る。人言には普遍的
 なものがある。若し人言が自己の自
 我を考慮するべし唯一の要素たる如く世界に
 在りては、その時にほこの世界は、
 その人にとり想像し得る最要の牢獄となる。こ
 れら。これ。人言の最深の歡喜は、全体と
 融會する。これにより、益々大となる。こ
 とあるからだ。若し万物に共通の原則がある
 ならば、我々が見た如く万物と融會する

二とは不可能事であらう。法則を見出し、
 此に従ふことによつてのみ、我々は偉大とな
 り、普遍的なものを了解するのである。之に
 及し、我々の個々の欲望が普遍的な自然法則と
 衝突する限り、我々は苦痛を嘗め、効果も嘗
 らない。
 我々は神に向ひ特別の許しを祈り求めた時
 代、即ち我々が自然法則は我々自身の便宜の
 ため中止されるべきを期待した時代が去つた
 。然し今日では、我々はそんな事をせず程
 馬鹿ではなへ。我々は法則は排斥する。二の
 出来ぬまゝ知つておろが故に、強くなる。二の
 法則は我々から離れ、或物ではなくなる。我々自
 身に支配する法則である。普遍的な法則に現は
 れる普遍的な力は我々自身に力と一である。そ
 の力は我々が小なる所、即ち我々が物事の流
 水に逆らふ時には妨げとなるであらう。然し
 我々が大きな所、即ち我々が万物と接合して
 る時には助けとなるであらう。かくて我々が
 科学の助けによつて自然の法則のより多くを

知る 操に在るに一ハ、我々は力を増し、宇宙
 身⁽⁸⁰⁾王得る操に在る。我々の視覚器管、移動器
 管、作力は全宇宙にわたるものと在る。蒸
 気や電氣は我々の臍となり、筋肉となる。
 かくて我々は依つて以て我々か全身を己ハ
 自身のものと呼び得、全身を己ハ自身の
 として用ひ得る關係と云ふ事理が我々の身体
 組織を一貫して存すると同様に、依つて以て
 我々か全宇宙を我々の延長せる身体と呼び、
 それを全宇宙をその通りに用ひ得る中絶する
 ことをなす關係と云ふ事理が宇宙を一貫して存
 すると云ふことと知る。そして今日の科学時
 代に於ては、我々の宇宙我々に対する自己の要
 求權を十分に確立するにとが我々の努力であ
 る。我々は、自己の欠乏や苦しみの全ては我
 々の此のふたを要求權を實現するにとの去來
 ぬことに基いておるのを知つておる。眞に、
 我々の力には涯がない。何故かき小は、我々
 は普遍的法則の表現である普遍的力の外には
 ないからである。我々は病や死を圧倒し、若

痛や欠乏を克服する道程にある。何故かそれ
 ば、我々は科学的知識を通じて絶えず普遍的
 真理の王座の物理的方面に於て了解する道程
 にあるからなり。我々が克服するに、水、苦痛
 、病、力の欠乏は絶対的のものではなくて、か
 らるもの王座をせしむるものは我々の普遍的自我
 に対する個人的自我の調和の欠乏であること
 を知る。

このことは我々の精神的生涯にとつても同
 様である。我々の裡なる個人が宇宙人の正當
 なる支配に衝突する時に我々は道徳的に小なる
 一つ、苦しまねばならぬ。かゝる状態は
 我々の成功は我々の最大の失敗であり、我々の
 の欲望の充足は我々を第一層貧弱なものとする
 。我々は自らのために特別の利得を渴望し、
 我々は如何なる他人も共にする王得ぬ特權を
 享受せんと欲する。然し絶対的に特殊な凡そ
 の物は一般のものと断つて我々を区別せず
 け小はならぬ。かゝる内乱状態は、人々は
 常に防塞の役で生活し、利己的を如何なる文

明請正でも我々の家庭は眞の家庭でなく、
 人爲的防塞が我々を取囲んでゐるのである。
 然し、事物の本質に我々を不幸ならしむるが
 如く、事物が固有するものがあるか、如く、我々
 は不幸であるか、不幸であるか。普遍的善は幸福
 正以て我々に報ゆるべく待機してゐるが、我
 々の個善は正水を受けやうとしな。我々の
 自我の生活は、到る處に衝突やぶら。さ
 起し、社会の普通の調和を引くり返し、凡中
 程款の不幸を生ぜしめるのである。我々の

自我の生活は秩序を維持する左めに人爲的強
 制や虐政の組織が在る形態を作り、毎瞬時
 人類が恥かしくする。我々の只中のいやさ
 判を正我慢せねばならぬ。抑て破目に物事を到
 らしめよう。
 我々の力は強くなる左めには、普遍的力の法
 則に従はねばならぬ。且つ又その法則は我
 々自身のものなること。正如實に接らねばなら
 ぬ。正知つた。その抑に、幸福に在る爲に
 は、我々は個人的意思を普遍的意思の主權に

周囲の人々の暗々裡の親切な意思が却つて彼女
 に衝撃を与へたのびあつた。こゝれ母たるもの
 の困難は、母たるものの手放すことの出来ぬ
 妻の権利によつて母たるもの自身のものびあ
 り、彼女は便宜と云ふことの如何を命令に従
 つてもその権利を放棄する積りはなかつたか
 らであつた。人々の自由は困難を救つてもら
 ふことの裡には決して与くつて、自分自身の左
 めに困難を取ることの自由である。即ち、困
 難を人々の歡楽の要素とすることの自由であ
 る。我々が自己の個性は自己の存在の最善の
 意味びきくつて、自己の裡には不死があり、死
 や苦痛を恐れず、苦痛を歡楽の反面とのみ見
 る宇宙人か宿小ると云ふこととを了解する時に
 のみ、困難は歡楽の要素とせられ得る。こゝれ
 を了解せし人は、不完全を存在としこの我々
 の真の富びあるものは苦痛であり、完全と序
 を共にする程に我々を偉大にしめし優越あ
 るものとしせしめしものは苦痛をなすこととを
 知る。その人は我々は乞食びなすこととを知ら
 ず。

る。即ち苦痛は此世に於る貴い凡この物、我々の力、我々の智慧、我々の喜を得る左めに
 払はれぬやうに破いた代償であることと正知つ
 こゝにある。苦痛の裡に完全の無限の可能性、歡
 喜の永久の發現が象徴される事、苦痛を
 変けることに對する畏れを全然失ふ人は貪乏
 と墮落のどん底に下へ下へと沈んで行くこと
 子にことと正知つこゝにある。

苦痛が悪くまり、且つ我々を不幸に扱へん
 び侮辱に對する復讐をするのは、我々が自己
 満足のため、苦痛の助けを懇致する時のみ
 である。こゝに苦痛は不滅の完全への奉仕に獻
 げられる純潔の處女であり、神の祭壇の前
 に本妻の位置を占める時に、その黒い面紗ヴェールを
 扱はず、最善の歡喜の顯現として傍觀者に
 その教を露はすが故である。